

無断転載禁止

『新しい刺戟伝導系の発見によつて世界医学に貢献出来る』  
 『是は誠に結構なことであるが既知の刺戟伝導系について経絡は十分に検討されたであろうか、凡ゆる既知の刺戟伝導の可能性が追究されて尙経絡の事実と称する竜野氏の所謂第四伝導系の成立する余地があるであろうか。』  
 私の見るところでは、この様な見地からの実験的研究は全く行われていない。代田氏の研究を専ら主義と断定している様ではその意志すらも合せていないのであろう、現代医学的検討を故意にさけて第四刺戟伝導系などと呼号するのはインチキ治療師のためにする言説と選ぶところが無い。

一体経絡を刺戟伝導系となす考が得手勝手な独断である。その様な考は経絡説には殆んど見当らない、こちらの希望的観測をよみこんでいると見て差支へない。

竜野氏の経絡肯定の効用 その二は  
 『鍼灸は単なる物理的な一般刺戟ではなく特殊な刺戟となり、鍼灸はそれによつてのみ独立する』である。鍼灸は単なる物理的刺戟（化学をも含めて）ではないと云うがどう考へて見ても鍼灸は物理的刺戟以外の何物でもない。勿論この物理的刺戟に対する反応は生体反応であつて物理的な反応ではない。

鍼灸が特殊な刺戟であつて、鍼灸はそれによつてのみ独立するとは如何なる意味であるか、是は経絡護持論者の均しく強調する点であるが、そこには鍼灸を特殊な治療法として独立せしめて現代医学の治療一般に對置せんとする意図のかくされてゐることは明かである。

る。当に衣の裾から鎧である。  
 斯く理解すれば現代医学との接触を故意にさけてゐる意図は、鍼灸を覆う神秘のベールを剥奪されることを、おそれてのことである。

鍼灸治療は現代医学のメスの前に無味乾燥索然たるものとなるであらうか、否である。臨床的事実は是を証して余りある。古人と吾人とにその経験に於いて何の経路があるか、我々は現代医学の範疇に於いて鍼灸治療の臨床的事実を検討して真正の鍼灸医学を確立すべきである。かかる鍼灸研究の正道を阻んでいるものが経絡論者である、我々は斯くの如き邪心による鍼灸の保全を断固否定する。

鍼灸医学の正しい進歩は経絡的妄想よりの脱脚を前提として始めて達成されるのである。

六、長濱氏の所説について

経絡を論ずるには長濱氏の研究に言及しなければならぬ。長濱氏の研究は今日の経絡研究の尖端をなすものであるからである。長濱氏の経絡の実験的研究は丸山氏と共著の『経絡の研究』に詳しく記されているが氏の最近の論説『経絡に関する問題』をも併せて考察することが妥当であると思ふ。

私は長濱氏の業績に於ては鍼灸による経絡の研究よりも古文獻にある経絡を今日の医学の問題として取上げて、そこに介在する問題を比較の広い視野から明かにした点を重視した。即ち肯定論者の側からも否定論者の側から

このコンテンツは株式会社医道の日本社、著者が有しており、日本の著作権法および著作権に関する国際法によって保護されています。営利・非営利にかかわらず、複製、複写、コピー、販売、その他の再利用を固く禁じます

無断転載禁止

1952  
 経絡説によつて行われたと見ることは出来ない。私は鍼灸治療と経絡説とは区別して考える必要があると思ふ、長濱氏の古典への突込んだ研究には十分に認むべきものがあるが、それと鍼灸治療そのものと結び合せて考えると、これに無理があると思われる。

経絡説が支那思想特有の觀念性、実利性を示していることは注意して是を見れば随所に発見出来ることである。この点に於て経絡を見てゐるのは間中氏だけであるが、これは支那思想研究家にとつては常識である。支那人の独断的な御都合主義によつて構成された経絡説を性急に実証的な現代医学と対決せんと云うやう方に根本的な誤謬があるのである。鍼灸の研究が古文獻の研究から出発したことは何としても不幸であつた、鍼灸研究は臨床的事実から出発すべきである、この正しい道を阻害してゐるものが現今の経絡治療の流行である。

臨床的事実を曲げて既成の経絡説に依存し自ら観察したところ、親試実証せしむるに基いての治療体系の確立になす意欲を全く失つてゐるのが鍼灸学界の現状である。笑うべき尙古主義である。怯懦なる保守主義である。竜野氏は長濱氏の鍼灸による経絡の事実が一例であつてもそれを認めるかどうかと云つてゐるが、鍼灸臨床に於ける鍼灸は仲々把え難い現象で一例づつ認めていたのでは竜野氏の云う普遍的法則など出来るものではな

い、それが鍼灸臨床に於ける確率の高い一般的事実でなければ問題にならない、況や特殊な感受性を有する患者であつて症例であつて見れば尙更である。勿論過敏な患者では病部に選択的に響くと云う事実は極めて多い現象であるがそれはそれとして経絡の御厄介にならなくても十分に説明はつくことである、経絡上を古典の記載どおりに走行する感覚と云うやうなものには長濱氏の実験では事実であつたとしても鍼灸臨床の一般的事実とはちがつたものであり、少くとも稀な現象である、長濱氏の発見した感覚圏のものについて考へてみても疑義は二三に留らない。

先づ古典に記載された経絡の意味内容との感覚圏と一致するかどうかと云うことである、経絡の概念は例令素朴な形にしろ感覚圏とか刺戟伝導系とか云うものを内包してゐるであらうか、それと気血の循行路と云う考へと一致させることが出来るであらうか。

鍼灸によつて大椎を定めると云うが、その検出は随分むづかしいもの様であるが、経絡発見者はその検出法をどう考へたか、経絡説によみこんだものと思はれる。

仮に経絡を感覚圏として規定して見てもその様な感覚圏の出方に我々は臨床上全く遭遇しない、我々の臨床では例令ば次の様なことにはよく遭遇する、即ち背部の刺戟で浅く刺した場合は上下に、深く刺した場合は帯状に鍼響が起る、然もこの様なものは比較的高い確率で出て来る、是などは前者は胸椎神経後枝

このコンテンツは株式会社医道の日本社、著者が有しており、日本の著作権法および著作権に関する国際法によって保護されています。営利・非営利にかかわらず、複製、複写、コピー、販売、その他の再利用を固く禁じます

無断転載禁止

後者は肋間神経で充分説明出来るのである。竜野氏はこの本態未知の感覚圏は第四刺戟伝導系として脈管系統、神経系統とはその走行が一致しないと云つてゐるが、長濱氏の所説では必ずしもそうではない様である、執れにしても鍼灸臨床は第四刺戟伝導系によらずとも十分に成立し得るし、尙重要なことは生命現象の機構の中にその走行順序の明かになつてゐる脈管系統、神経系統に依存する治療は極めて鞏固な基礎の上に立つものである、その成績も又安定してゐる。この点経絡なる本態未知の感覚圏はどの様にして生命現象に関与してゐるのであらうか、是も又未知であらう、然し我々と雖も未発見の刺戟伝導系を全く否定すると云う訳ではない、我々の先輩三好氏は次の様な臨床実験を行つてゐる。

消化力の減退した減酸症の患者について、嚔氣を示標として鍼刺による胃運動に及す影響を検索したところ、足の三里でも三陰交でも腰部でも頸部でも嚔氣を催す患者があつたが第一乃至第三胸椎断区に刺戟が最も有効であつたと云う、即ち確率がこの個所が最も高かつたのである、これに類したことは我々臨床では他にも少くない現象である、以上くどくどと述べたのは私は次のことを云いたい為である。『鍼灸の研究に於ては例外的な奇異な現象のみを取上げるべきではない、最も一般的な現象を取上げるべきである、そのことによつて鍼灸の特殊性のベールが取除かれることにならうとも敢て退いてはならぬと云うことである。』又長濱氏は経絡は脈管外循環と関係している様に云つてゐるが脈管外循環は脈管循環に從属するものであつて、その逆ではない、仮りに脈管外循環と脈管循環を對象とする二つの治療法が成立し得るとして見ても脈管循環を對象とするものが治療としては比較にならない重さを示すであらう。

経絡は素朴な古代人の循環系統の認識に基、

保してゐる様に云つてゐるが脈管外循環は脈管循環に從属するものであつて、その逆ではない、仮りに脈管外循環と脈管循環を對象とする二つの治療法が成立し得るとして見ても脈管循環を對象とするものが治療としては比較にならない重さを示すであらう、それによつて鍼灸の特殊性を主張することも出来まい。我々は鍼灸は作用物質等とはちがつた極めて単純なしか微量な物理的刺戟であると思ふ（勿論二次的には化学的刺戟として働くことも考へられるが）この様な鍼灸刺戟が疾病現象に對して複雑な高次の反応を惹起するのは、そこに神経機能の介在を考へることなくしては全く理解し難いところである。

くものとして現在の循環に関する知見により更に異を立てるなど愚の骨頂である。長濱氏は刺戟感受物質が経絡に集注してそれによつて脈管とは違つた走行を示すと云う想定をしてゐるがそれが鍼灸にのみ反応する訳でもないであらう、それによつて鍼灸の特

このコンテンツは株式会社医道の日本社、著者が有しており、日本の著作権法および著作権に関する国際法によって保護されています。営利・非営利にかかわらず、複製、複写、コピー、販売、その他の再利用を固く禁じます